（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書

令和 7 年 3 月 21 日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　文理　学部（人文科学研究所）
資格・氏名　准教授　伊佐野龍司
■本報告書の内容を公表することは了承しております.
（公表可の場合，チェック■すること）

令和６年度海外派遣研究員（短期 A）の研究実績を，下記のとおり報告いたします.

記

１　区　　分　　短期 A
２　研 究 課 題

身体に基づく対人関係の構築を企図した体育の指導方略の開発に関する研究

３　派 遣 期 間　西暦 2024 年 4 月 1 日　～　2024 年 8 月 26 日
４　派　遣　先　　ドイツ連邦共和国及びスイス連邦
５　研 究 目 的

コロナ禍における広範で長期的な社会的隔離による孤立と孤独が，子供・青少年の精神的健康に及ぼす影響が報告されている(Loades, M. E. et al., 2020)．また，パンデミックに伴う公衆衛生上の対応が社会的相互作用を劇的に変化させたことが指摘されている(Long, A.et al.,2021)．こうした対人関係に関わる世界的な課題への対処は，自主性の尊重や効果的なコミュニケーション等の心理学アプローチが提唱されている(Brooks, K. S.et al.,2020)．このように社会の劇的変化に伴う人々の関係性を構築する上で生じている課題に対して，心理学に依拠した言語的・能動的・自然科学的な立場から対処的な方策が採られてきた．しかしながら，子供たちの発育・発達やインクルーシヴの観点を鑑みると，対人関係の構築に能動的態度を求める対策は，個人の特性を捨象し，むしろ困難さを顕在化させる．そこで，本研究は人々の身体に通底する意識や共感構造を援用する現象学に立脚し，人間科学的な立場から，人間関係の構築を主眼とした体育の指導方略を開発することを目的とする．

６　研 究 概 要

本研究の目的は，人間科学的視座から人間関係の構築を主眼とした体育の指導方略を開発することである．研究期間の日程を鑑みたゴールは次の通りである．

【研究 1】派遣先において身体を介した関係性構築，運動指導に関わる文献研究を行う．日本では得られることのできない文献等も加えて，体系化を図る．また，実践研究のレビューや現地の体育授業も観察し，具体的な活動を整理する．
【研究 2】研究 1 の成果をもとに具体的な体育の指導方略を立案する．派遣先の研究者とも協議を踏まえた指導上の態度・姿勢といったコンセプト，準備（グルーピング）・活動に内包する要素等を明らかにした上で指導方略を立案する．
【研究 3】国際学術雑誌への投稿に向けた戦略を協議する．論文を投稿する上でテクニカルな視点を現地の研究者と情報共有し，本研究を発信する基盤を固める．

７　研究結果・成果

前項の各研究計画に基づいて結果・成果を報告する．研究 1 については，「日本では得ることのできない文献」を収集し，文献の精査を行うことができた．出張期間中，派遣者は，University of Leipzig Faculty of Sport Science に客員研究員として所属した．同大学は，1409 年にドイツ国内で継続的に運営されている大学としてはハイデルベルク大学に次ぐ 2 番目に古い大学である．

また，同学部も旧東ドイツのスポーツ科学の中枢であり，日本に影響を与えた研究者が多数所属していた．その筆頭と言えるクルト・マイネル（Kurt Meinel）は，1960 年にゲーテのモルフォロギー概念を根幹とした一般「運動学」(Bewegungslehre) を発刊している．同書は，後に邦訳（金子，1981）され，日本にスポーツ科学における運動学という領域を広く知らせることになった．「方法学への直接的な基礎理論を提供するこの運動学」(川口，2000）は，現場における実践性への期待を担いながら，現在は日本スポーツ運動学会の設立（1988）や教員免許（保健体育）取得のための必須科目「運動学（運動方法学を含む)」(1990）に位置付けられるなど，体育・スポーツ科学の一領域として定着している．本研究が理論的に依拠する発生運動学（金子，2002）は，マイネルの運動学の真意を汲みながら，現象学を基礎に据えた上で，運動者の運動感覚図式が構成される発生地平まで遡源して解明を試みている．そして，この発生運動学の理論的な前提とされているのが，ボイテンディクの運動理論である．ボイテンディクは比較心理学などにも従事していたが，基本的な考え方は，現象学的人間学に基づいていた（木田ほか編，2014）．現象学的人間学は，「受動地平における動感意識の発生分析を可能にする現象学を基柢に据えながら，人間学的なパトス的運動世界も同時に分析の視野に入れた学問的立場」(金子，2005)である．そのため，身体に基づく対人関係の構築を試みる本研究の理論的立場であるが，その文献は部分的に翻訳されながらも，最も多く引用・参照されているであろう「姿勢と運動の一般理論」（Allgemeine theorie der menschlichen haltung und bewegung）は未だ翻訳されていない．このように，日本の運動研究や身体を考察するための基盤となる文献の翻訳や文献研究が十分に蓄積されている状態とは言えない．

こうした前提のもと，この度の派遣期間において，事前に確認することができなかったボイテンディクをはじめとする数多くの論文・文献を収集することができた．数多くの文献のなかでも，自己と他者の関係を検討する上で「痛み(Wezen en zin van

de pijn)」,「全体の構造の中での部分の機能（Die Function der Teile im Bilde des Ganzen)」について人間学的現象学に分析した論文は，本研究の目的と今後の研究の推進を大きく後押しする．これらの貴重な文献の蓄積と関連性の整理を研究期間内に実施できた．今後は現在の運動理論との関係や，身体に基づく人間関係構築との位置付けを明確にする必要がある．

研究２については,「派遣先の研究者とも協議を踏まえた指導上の態度・姿勢」について議論を進めることができた．派遣先のスポーツ教育学研究室は，インクルーシブ体育に関する制度・教師教育・授業実践等を中心的な研究テーマとしている．そのため，教師の態度・姿勢は双方にとって指導を下支えする重要な位置付けであった．所属先の教授との協議では，Hafeneger（2013）の議論に基づき，インクルーシブな教授環境は「相互尊重の姿勢，他者の主体性，本質的価値の享受，価値ある他者性への尊重」が下支えすることが強調された．その上で，違いを尊重することによって，その違いを教育的に活用可能な潜在能力として捉えることを意味するという．これにより「多様性への感受性」も生じていく．体育教師にとって，他者性を認識することは，生徒の個々の動きや関連する諸能力の開発を支援することであり，差異のカテゴリー(例えば，性別や障害)に関する一般化や固定観念的な態度・姿勢によって指導することを許容しないことを意味している．こうした態度を持ち合わせることで，障害であれば，客観的指標に基づき個人の欠落として捉え,それを補う「医学モデル」から,障害という分類枠組み自体を問い直し,“特性のある個人”として捉えることが可能となる.こうした価値ある個人が授業に参加するための教師の態度は常に更新していかなければならず，そのための省察が重要視される．教師の指導上の態度には立脚する理論的背景が関与するが，自らが持ち合わせている自然的態度を判断中止することの重要性については見解が一致した．

そのほかにも，授業デザインにも当該視座を導入することで技術的な優位性を持ち込まず，相互に協働して課題解決することが可能となる．なお，これらの授業態度を包含した授業デザインやその情報発信については，所属研究室とチューリッヒ教育大学が連携して研究していた．スイスにおいても，すべての子供や若者が運動・スポーツに取り組むことは長年の課題であり，それらの推進にインクルージョンの考えを基盤に据えている．特に両研究室は Bewegte Schule（動きのある学校）の取り組みにおいても見解を持ち合わせている．当該の取り組みは，ドイツ語圏に中心的に確認され，学校教育全般で運動を取り入れながら学習を進めていくことを狙いとしている．これは健康や体力の保持増進を促進することのほか，座学での集中力向上や学習自体を動的にすることを企図している．そのため，スポーツの授業以外でも，休み時間や他教科の授業，あるいは机や椅子等の学習環境面にも反映させており，教科を超えた学校教育活動全般に及んでいた．ここにも上述の態度を基盤としながら，誰もが参加できる工夫が組み込まれており，授業に留まらない取り組みが大変印象的であった．また，近年は移民の増加によりドイツ語を母語としない子供たちへの対応も増えている．そのため，研究室間で互いの教育実践に参加し合い協議を進めている．特に，デジタル機器の導入は，上述の子供たちへの参加を促す有効なツールとして機能し，視

覚情報を用いて各エリアに分けられたステーション型の授業実践が特徴的であった．筆者もドイツ語を母語としないため，指導実践の場で学生たちの指導が理解に結びついていたのか，デジタル機器対応や指導は適切であったか協議の一員として参加した．

こうした学校全体を含めた授業デザインと教師が持ち合わせる態度・姿勢は，全ての教育実践の基盤として位置づいている．一方で，拙稿において，特別な教育的支援を必要とする生徒があつまる学校に対して長期の観察を実施した際に，当該学校の保健体育教師も導入していた考え方であった．この両国に共通する態度や授業のデザインが確認できたことは大きな成果と言える．

研究３においても journal strategy を共有し，今後の研究発表についても協議することができた．また，両国の研究室間によるデータの共有や共同研究の基盤も構築することができた．さらに，現状の潮流を協議することによって，共通した視点と，十分に研究蓄積がされていない領域についても確認することができた．なお，先方が有する知見を共有するには，単に依頼するだけで成り立つことはない．相互の研究上のビジョンや課題を共有し，理論的背景の共有などのほかにも，日々の信頼関係の構築が欠かせない．これまでの研究も調査フィールドに長期の参与観察を実施してきたが，本出張においても活用することができた．

本研究のゴールは，研究期間を鑑みた上で，前項の研究１から３に着手することであった．本研究の主な成果である①日本では入手が困難であった文献の入手，②指導方略を提案するための基盤となる教師の態度と学習活動への応用の確認，③journal strategy の共有と関連分野の研究動向，今後の進むべき方向性を定位することができた．科学研究費助成事業が典型的に示すように，今後の研究に国際性が求められていくことを鑑みると，現地で研究動向を確認し，自身の研究の独創性を確認することができたことは知見の獲得と共に大きな成果となった．また，このたび，受け入れ研究室とも友好的な関係を構築することができ，継続的に情報交換，共同研究を進めるための基盤が構築できたことも特筆すべき成果のひとつとなった．

なお，現地において多くの教育活動についても視察することができたため，それらを取りまとめ学生教育に反映させていくことが新たな課題となった．〔７　研究結果・成果（つづき）〕

以　　上